日本のプロコーチ宣言第1号　榎本日出夫（日立戸塚コーチ）

私のバスケット狂書

その（19）

恩人の急死に衝撃

発奮して宿願の全日本も制覇

「決戦」の直前まで焦り

日本リーグが終ってから、山崎に負けたくやしさと、「もう例え全日本で負けても…」という強気と弱気の交又する複雑な日々がはじまりました。

うまく練習が進んでいる時は"強気"が出て「これならいけるぞ。よし、絶対優勝してやるんだ」という気持ちになってきますし、調子にのって焦ってくるとティーム全体の歯車が狂ってしまい、どうもうまくいかなくなる。そうすると"弱気"の虫がおきてくるといった状態でした。

しかし、毎年十二月二十五日を過ぎると高校のティームが沢山合宿に来るようになり、あたかも戸塚の体育館が"バスケット強化団"（？）に乗っ取られた形になるのですが、この時期になって始めて欲が出てきたわけです。それというのも、合宿に来ている高校の先生や生徒の、時には厳しく、時には暖かい声援があったからなのです。戸塚には女子ばかりでなく、男子も合宿に来てくれるので、こちらの無理な注文も聞いてもらえるし、お互いに練習をするなら、なにか得をしなければ損だという考えがいき渡っているので、とにかく毎日が選手にとっても指導者にとっても"地獄"になってくるわけです。

その中で指導者も選手も鍛えられ、特に、この時は戸塚の選手にとってはもちろん、私にとっても絶対勝たなければ、この恩返しはできないと感じたのでした。この感じがあってからというもの、精神をなお一層集中させることに私自身が目標をおき、決して負けては絶対にならないと強く心に誓いました。

それからというもの、とにかく"鬼"になって少しの妥協も許さない心意気で一と決心しました。いかに今まで"ダレ"ていたかと思い知らされました。こんないきさつがあったものの、物事を冷徹に判断すればするほど、対山崎戦では戸塚が不利となってくるのは明らかになるばかりです。

しかし、そうはいっても、手をこまねいて試合がくるのを待っているばかりでは"船"がないのですが、私にとっては、これ以上のことは頭に浮かんできませんでした。

なにしろ、作戦も各自の動きも相手側にはTRという機械を通して、お見通しなのですから、それから考え方を発展させて、作戦や動きかたを変えていかなければならないのです。

「うちをかく動き」、「より正確なコミュニケーション」。

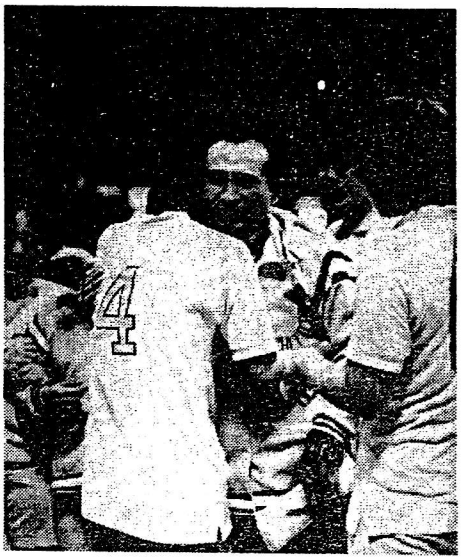
これが、私が選手にしてやれる最大の仕事だと気がついた時には、もう試合がはじまる数日前でした。

しかし、それを是正し正確にするためには日が迫りすぎていましたし、私も非常にあせっていました。ところが毎年十二月三十一日には紅白歌合戦を見てから、皆で初もうでに行く習慣がありますが、この時、深大寺に行って手を合わせた時、なにかピリッとした感じがありました。

なんだか、はっきりはつかめなかったのですが、帰ってから寝つかれず、いろいろ思い悩んだすえ、とにかく選手には自信をもたせるなにかを持たせて試合をやらせること。

相手ティームとは「？」と思わせること。このふたつを要点にして全日本を戦かっていこうと考えました。

〈続く〉



榎本日出夫

武蔵中学（東京）、武蔵高校（同）、武蔵大学（同）をそれぞれ卒業。現在、女子実業団チームの日立戸塚コーチ。昭和十六年七月七日生まれ

△現住所▽横浜市戸塚区舞岡町一二二一ロー六　電話〇四五（八一二）二七〇九番。

交又し続けた"強気"と"弱気"

＝前号までのあらすじ＝

十年前のある夜、杉野短大からコーチ依頼の電話があり、好きなバスケットができるーと深く考えずに引き受けたことが私の人生を大きく変えた。その後、先輩や恩師のすすめもあり、日立戸塚を見るようになったが、この時、どうせやるならーと「プロコーチ」の看板をあげ"バスケットでメシを食う"決心を固めた。そして色々悩み、苦労を重ねたすえに日本リーグ入りを果したが、それまでの苦労と疲労の積み重ねがあり、やめようかと考えもした。しかし大好きな選手たちやバスケットを放り出してまで去る勇気はなく、結局、日本一の座を目指して、もう一度挑戦する決心を固め、その第一目標を当時日本リーグ第三位の座にいた第一勧銀においた。それから"素材集め"、同一目標に向かっての練習に取り組む心の確立につとめ、四十九年は日本リーグ、全日本とも三位となった。そして五十年。日本リーグで強敵に連勝して遂に日本リーグ初優勝を遂げ、いよいよ"大事業"の全日本総合に照準をおいた。

BASKET BALL IS MY LIFE